小規模タイプの試行案例（遠隔参加併用面接授業「古典文法演習（仮称）」）構想案メモ

科目：　人間の探求・専門科目・面接授業「古典文法演習（仮称）」

（一）内容の概略とねらい：

（1）内容の概略：古今和歌集入集歌を用い、主に構文論的な視点で歌の表現を分析し、文法的な考え方を実践的に身につける。

（基本的にはいわゆる学校文法の文法説に従い、近時の文法論、（係り受け、助動詞の働きなどについての成果など）も適宜取り入れる。

これらを、一方的に講義するのではなく、学生自身の予習と授業内での質疑によって、考えを深めあっていくことを基調に。）

さらに、本居宣長『古今和歌集遠鏡』の「俗語解」の記述を併用し、文法的な分析に不慣れな学生に対しても入って行きやすいように配慮する。

（2）科目開設の意義

本学学生には、国語学分野や古典作品ついて興味関心を持つ者も多いが、必須とも言える文法的な基礎知識や分析能力が極端に欠落している。

文法的な力は、単に文法事項を記憶するだけでなく、実際に自ら例文にあたり、分析を試みる中で培われるものであり、演習形式の授業の持つ意味は大きい。しかし本学の放送授業では、演習的な授業は実現がかなり難しい。また面接授業でも、活発な学習活動に支えられた演習形態を、全国レベルで展開することには様々な困難が伴い、あまり現実的ではない。

そこで、比較的小人数の演習形式を、双方向メディアを利用して開設する意義は大きいと言える。

（二）具体的な授業内容：

受講生は、古今和歌集からの各自一首を担当し、あらかじめその文法的な分析を用意し、それを発表する。

参加者は自分の発表担当の一首以外についても、必ず予習を行い、積極的に討論に参加できるように準備する。

具体的な授業形態：多摩ＳＣゼミ室で学生５名程度のゼミ形式の講義をライブで行い、インターネットＴＶ電話会議システムを用いて遠隔地からもこ参加。

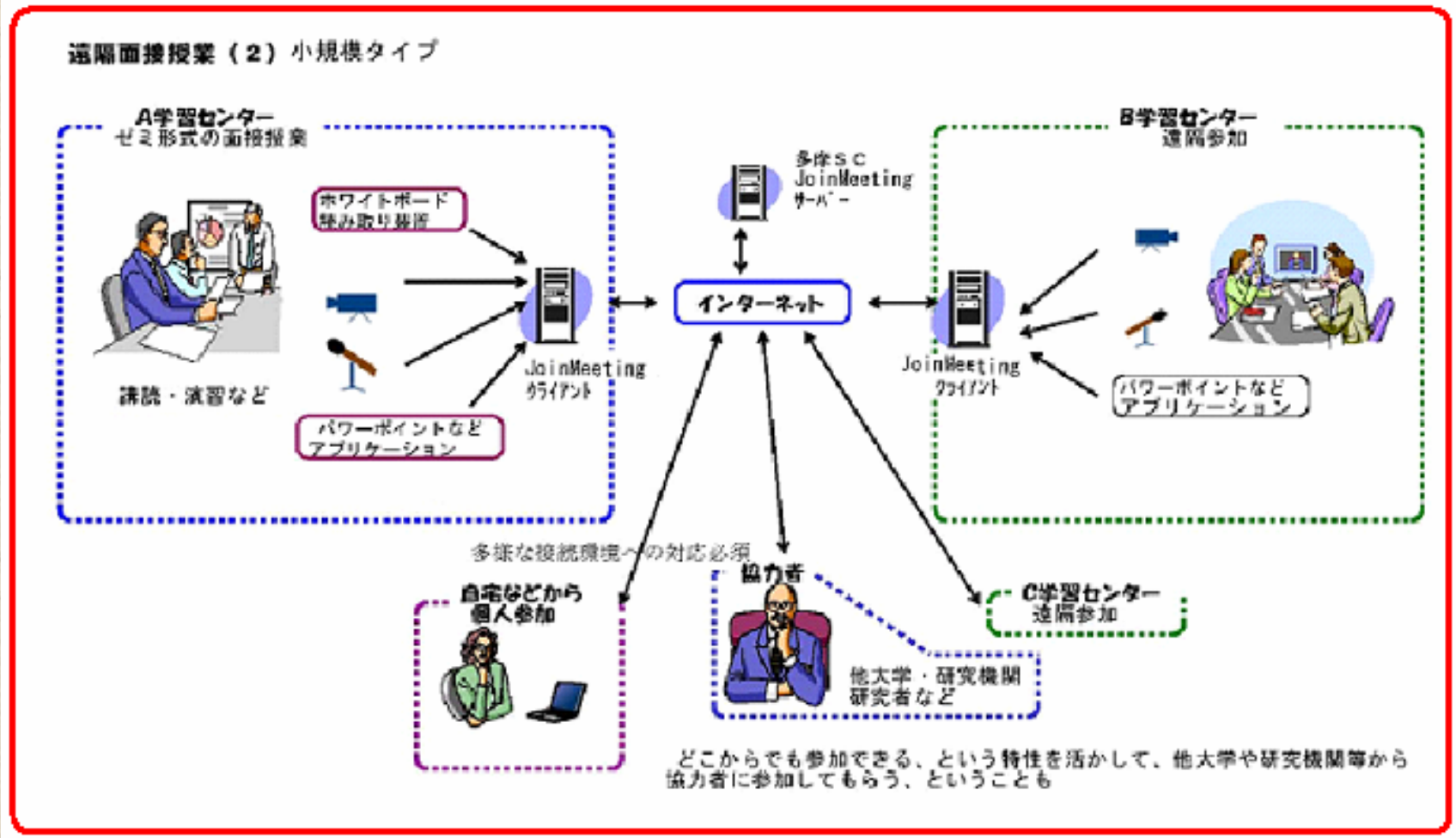
本学の学生の特殊性を考えた場合、演習形式には不慣れであることが懸念される。そこで授業第１回目にオエンテーションを行い、授業のねらいと具体的勉強方法を解説する。（併せて遠隔参加者の接続環境が様々であることを考慮し、接続試験を行う。

オリエンテーション後１週間程度以上の予習期間を設けて第２回目以降を行う。

遠隔面接授業

インターネットTV電話利用の今後の展開

小規模タイプ



修論・卒論の遠隔指導とほぼ同じ構成→システム構築・運用のノウハウは確立済み

今後→教育内容・教育方法の検討（活発な議論や積極的参加）

遠隔参加併用面接授業「古典文法演習（仮称）」構想案メモ　　h16.09.07　杉浦

科目：　**人間の探求・専門科目・面接授業「古典文法演習（仮称）」**

（一）内容の概略とねらい：

（1）内容の概略：**古今和歌集入集歌を用い、主に構文論的な視点で歌の表現を分析し、文法的な考え方を実践的に身につける。**

① 基本的にはいわゆる学校文法の文法説に従い、近時の文法論、特に発話者（この場合は詠者）の主観に基づく表現に着目した構文、係り受け、助動詞の働きなどについての成果も適宜取り入れる。これらを、一方的に講義するのではなく、学生自身の予習と授業内での質疑によって、考えを深めあっていくことを基調に考えた。

②さらに、本居宣長『古今和歌集遠鏡』の「俗語解」の記述を併用し、文法的な分析に不慣れな学生に対しても入って行きやすいように配慮する。ただしあくまで文法論的な分析を目的とするのであって、文学作品として一首を鑑賞したり、作歌の背景を考察したりすることを目的とするものではない。

（2）科目開設の意義

① 本学学生には、国語学分野や古典作品ついて興味関心を持つ者も多いが、必須とも言える文法的な基礎知識や分析能力が極端に欠落している、あるいは毛嫌いして避けようとする傾向さえ見られる。一般の大学の国語・国文学専攻でも、類似の状況は見られるが、高等学校での古典学習に直結した基礎力に期待することができるのに対して、本学の状況は深刻と言うこともできる。

文法的な力は、単に文法事項を記憶するだけでなく、実際に自ら例文にあたり、分析を試みる中で培われるものであり、演習形式の授業の持つ意味は大きい。しかし本学の放送授業では、演習的な授業は実現がかなり難しい。また面接授業でも、活発な学習活動に支えられた演習形態を、全国レベルで展開することには様々な困難が伴い、あまり現実的ではない。

そこで、比較的小人数の演習形式を、双方向メディアを利用して開設する意義は大きいと言える。

② 特に、本学学生は多くの場合、「間違った」答えを出すことを極端に嫌う傾向が見られ、直接「正解」を教わって暗記しようとすることが勉強であるかのように考える傾向が見られる。そのことが逆に積極的な学習活動を阻害しているとも言える。演習形式では、たとえ自分が「間違った」考えを持っていても、質疑や討論の中で自らの力でそれを正していくことができ、ある事項について様々な説明（解答）が可能な中で、最も適切なものを選んで行く力が求められる文法的分析では、このような授業形態が最も適していると言える。

③ 一方、学生が多様なバックグラウンドを持つ社会人であり、しかも初対面に近いような集団で、いきなり有意義な討論を期待することは大変難しい。これに対応するためには、取り上げる内容やその扱い方に工夫が必要と思われる。

この授業で取り上げる内容と方法では、「一首を、いわゆる学校文法に従って品詞分解し、文法的に説明する。」という所に、客観的に明確な線を引くことができる。これを目安にして、受講者がいったん同じ土俵上に立ち、そこから発展的な学習へと進む形で授業を構築することを考えた。

（二）具体的な授業内容：

（1）進め方

① 受講生は、古今和歌集からの各自一首を担当し、あらかじめその文法的な分析を用意し、それを発表する。

② いわゆる学校文法に基づく品詞分解と全語の文法的説明ができていることを、発表の目安水準とする。

③ 参加者はその発表に対して質疑を加え、討論を行うことでより理解を深め合う。

④ 参加者は自分の発表担当の一首以外についても、必ず予習を行い、積極的に討論に参加できるように準備する。

⑤　必要に応じて担当講師が誤解や理解不足を訂正・補足する。
⑤　一首について発表・討論併せて３０分弱程度をかけ、１コマあたり４～５首、全体で２０首程度を扱う。

（2）教材

①　受講者は必ず何らかの『古今和歌集』の注釈書と古語辞典を手元に置いて参加する。
②　『古今和歌集遠鏡』は担当教員側でコピーを用意し、オリエンテーション時に配布。
（③　参考文献：杉浦克己「古今和歌集抜き書き～物と心と係り結び」聖徳大学総合研究所論叢４）

（三）具体的な授業形態：多摩ＳＣゼミ室で学生５名程度のゼミ形式の講義をライブで行い、インターネットＴＶ電話会議システムを用いて遠隔地からもこれに参加する。

（1）参加人数

①　システムのキャパシティーから考えた場合（現システムの上限：１０カ所同時接続）
　ア：　東京多摩ＳＣでの直接参加＝５名程度
　イ：　インターネットＴＶ電話会議経由の遠隔参加＝数箇所
　　個人で自宅などから参加、
　　端末の整備された学習センターゼミ室から複数人で参加
　　（なお、Phoenix 端末経由で遠隔学習センターから参加（１カ所）も併用可能であるが、画像・音声の質や安定性に劣り、ホワイトボード機能がないなど利用学生の学習条件が極端悪くなってしまうため、できればインターネットＴＶ電話のみとしたい。）
②　授業内容から考えた場合：最大２０名（４～５首×４コマ）

（2）開設形態

①　予習が必須であることを念頭に置くと毎週型が望ましいが、土日型・集中型でも可能。
②　第１回目を下記（４）のオリエンテーション日程とし、その後１週間程度空けることが必須。

（3）評価

①　出席、担当歌についての発表、討論への積極的な参加、を主な評価項目とする。
②　さらに、授業終了後、指定期日までに簡単なレポートを課し評価の参考とする。

（4）オリエンテーション（兼接続試験）

①　本学の学生の特殊性を考えた場合、演習形式には不慣れであることが懸念される。そこで授業第１回目にオリエンテーションを行い、授業のねらいと具体的勉強方法を解説する。
②　場合によってはオリエンテーションの際に、院生・院修了生などによる、模擬発表・討論を加える。
③　遠隔参加者の接続環境が様々であることを考慮し、オリエンテーションの前の授業コマを用いて接続試験を行う。
④　オリエンテーション後１週間程度以上の予習期間を設けて第２回目以降を行う。

……